

「愛」から「心」が 消えた簡体字

12月中旬の某日曜日

2年目の前期が終盤を迎え、大学とアパートを往復するだけの平穩無事な生活の中で、時として、ドキツとする出来事に出くわすことがある。

午後4時過ぎ。クラスメイトの美麗(メイリ)から携帯メールを受信。「いま、学生寮の6階の窓から男子学生が飛び降りようとしている。女(メ)友(ト)友(ト)友(ト)の名前を叫んでいるらしい。寮の周辺は大騒ぎ」とのことだった。

翌日、教室はこの話で賑わった。老師の話では、学生の男女関係のトラブルやケンカ、寮内の窃盗事件が後を絶たないそうだ。数年前、校舎の屋上から女子学生が投身自殺を遂げる事件があったそうで、女子学生は妊娠していたそうだ。別の老師の話では、雲南大学で男子学生が寮の同室の男子学生3名を殺害する事件があった。原因は「悪口を言われた」ことだったそうだ。いずれも公にはならなかった。老師は「現代の中国人学生は「一人っ子」で育っているの、精神面の成長が未熟だ」とも言っていた。

改革開放から40年、純情無垢な時代は過ぎ、い

聯誼協会の活動を支援してもらっている。

12月31日～1月6日

12月31日。「大晦日」だというのに期末試験の初日。中国でももちろん「除夜(チュウシヤ)／大晦日」だが、中国の人々にとっては農曆の「春節(チュンジュエ)」の方が重要で、明日からの「正月」は3日間休日になるものの、「年末年始」の格別さはない。生活のリズムはまったく普段と変わらない。したがって、期末試験が行われてもなんの違和感もないのである。

私の所属する初級C班の期末試験は、31日の「総合課」から始まって、正月明けの1月4日に「口語課」、5日に「閲読課」、6日に「听力課」が行われ、試験終了とともに前期の課程が終了した。

「総合課」の試験は筆記試験のみだったが、最後の問題が「『我的朋友(私の友だち)』のテーマに基づき、10以上のセンテンスを用いて500字以内で作文せよ」というものだった。文法・語法の正確さと内容の有無、そして「簡体字(中国で使っている略字)」の正確さが採点対象になっていた。

作文問題のテーマと条件は12月初旬に示されていたので、対策には十分な時間があった。3日程で素案を書き上げた。それを学生老師の王东玲さんに添削してもらった。王さんは30分程の時間をかけて私の作文に目を通し、「ここはなにを言いたいのか」「ここはこういう意味か」と私が書き表したい文の内容を確認し、その意を表す文になるように赤字を入れてくれた。

最後の授業の日、清書した回答案を担当の尹老師に見せた。老師曰く「中国人学生に見てもらっ

たのか」と。多分、出来過ぎていたのだろう。尹老師は誤字を1カ所指摘しただけで、「没有问题(問題なし)」と返してくれた。書き上げた回答案は1200字ほどになっていた。お陰で試験当日、回答案を解答题紙に筆記するのに30分もかかってしまい、ほかの問題をじっくり考える余裕がなくなってしまった。

「口語課」の試験は筆記試験と口頭試験の2本立てだった。形式は前期の期末試験と同じだが、口頭試験の内容は高度になった。HSK(中国語検定)4級を意識した試験で、「3つある課題の中から1つを選択し、8つ以上のセンテンスを用いて、3分以上4分以内でスピーチすること。書いたものを見ることは禁止」というもので、課題は「漢字」「中国の名所旧跡」「中華料理」であった。中国語の発音・文法の正確さと発表内容そのものの優劣も試される。

当初、簡体字の「愛」の字を取り上げようと考えた。「愛」に「心」がないのである。「愛」は身体の中で感じるのだろうか。唯物論では「大脳」ということになるのだろうか。簡体字をどのようになぞって考案したのか好奇心が沸いて来た。これはなかなか面白い発表になると思った。ところが、授業中に老師に「中国の「愛」には「心」がない」ことを言われてしまい、あえなく撤回。

そこで、私が感じた漢語の表現の不思議さを取り上げることにした。その切っ掛けは、中国語の日常表現の中に「打……」という表現が実に多く使われていることに気づいたからだ。「打电话(電話をする・かける)」「打开(開ける)」「打错(間違える)」「打赌(賭けをする)」「打算(…するつもり・計画である)」「打工(アルバイトする)」などなど多種多様の「打……」がある。

「打賭」は日本語でも「バクチを打つ」というから、多分、ここからきているのだろう。だが、「打算」には驚いた。日本語では「損得を計算する」という意味合いがあるが、中国語にはない。教室で「……するつもりだ」「……するつもりだ」と発話するとき、どうしても日本語の「打算」の語感が頭を横切り、後ろめたさを感じてしまう。「打开」に至っては、「箱を開ける」のに「打」では、箱

を開ける前に箱を壊してしまうのではないかと心配してしまう。「タクシーを止める」のも「打车」という。渋滞の激しい昆明とは言え、車を叩かれたらタクシーの運転手でなくとも怒るに違いない。はなはだ乱暴な車の止め方をするものだ。忘年会の席で高明先生にこの「打……」表現の疑問を話したところ、高先生は「そんなこと考えもしなかった。でも、とても面白い疑問ですね」と笑っていた。中国語を日常使っている中国人が私のような疑問を抱くことはないのだろう。数日後、高明先生からメールが届いた。中国語の辞書には、「打」には26の意味や用法が記載されていると教えてくれた。手元の電子辞書で日本語の「打」を調べてみたところ、最大で5つの意味しか記載されていなかった。「中国語は複雑かつ奥が深い」と感心しつつ、ふと気がついた。日本語にも「打開」があった。「行き詰まった状況」は「開く」よりは、「打開」の方がびっぴりくる。

意外なことかも知った。ある中国人学生によると、「打电话」はもともと中国語にはなかった表現だ。それで、日本侵略時代の日本語が中国語化したものだということ。真偽は確認していない。

そんなこともあって、中国語の「打」の意味の多様性と日本語の「打」の違いをスピーチのテーマにしよと原稿作りにとりかかった。が、数時間経たずして、その内容を表現できるだけの中国語能力がないことを痛感。2度目の挫折。「打」を諦めた。

その後数日迷っていたところ、閲読課の教科書の中に「麻婆豆腐」の由来を記した文章を見つけた。これを「天の助け」と言わずしてなんとと言うか。テーマを「麻婆豆腐」に変えた。日本では四川省出身の陳建民さんがテレビで紹介したことによって日本中に広まり、いまでは中華料理の代名詞とも言えるほど人気のある料理となったことをつけ加えて、スピーチをまとめ上げた。中国人が知らない日本と中国のつながり。これが効を奏したのか、スピーチ終了後、担当の楊丹老師から「很有意思(興味深い)」の講評を得た。

1月7日 日本へ一時帰国。留学生の多くが帰り支度を始めていた。タイ国出身の美麗と青青は同郷の学生とともに船でメコン河を下って帰国すると言った。ロシア出身のデニスと女(メ)友(ト)友(ト)友(ト)二人で新学期が始まる3月までタイ、ミャンマー、カンボジア、ベトナム、ラオス、マレーシアを放浪すると言って、6日に昆明を旅立った。スウェーデン出身のオリアも、オーストラリア出身のエリサもインドシナ半島の国々を放浪した後それぞれ母国へ帰ると言っていた。雲南省はASEAN諸国の多くと隣接し、しかも1本の大河でつながっている。雲南から見る日本は遙かに遠い。



クリスマス・イブの南屏街は去年同様、勝手ご免の「スプレー雪吹きかけ合戦」で大騒ぎだった。タイ国出身のクラスメイトは準備万端整えて戦場に突入するも、あっけなく返り討ちに合い雪だるま状態に。今年はビニール製の「ハンマー」が登場した。